

源泉小学校

長谷川時雨

青空文庫

源泉小学校は おおでんま 大伝馬町の裏にあつて、格子戸がはまつた普通の家造りで、上つて玄関、横に二階をもつた座敷と台所。たぶん台所と並んだ玄関の奥へ教場の平屋を建てましたのであろう。玄関の横の八畳には通りにむかつて窓があつた。ここの畳へ座る人種は我々と違つていた。特別の机が配置してあつて、てあぶ 手焙りが冬は各めいめい自についている。窓の下のところには、紙だとうに針山もおいてあつた。

ひる お午近くなると女中さんや小僧さんがお供をともして、この八畳間の御門ごもん弟たちがやつてくる。お嬢さんたちは、芝居の八百屋お七や油屋あぶらやお染だと思えばまあ間違いはない、御大層なのは友ゆうぜ

禪^{ぜん}の座ぶとんを抱えさせてくる。お手習だけしているのもあれば、読^{よみ}ものをしにくるのもある。お針仕事をしにくるのもある。息子さん連もまじっていたようだが、子供心にも、そんな青い、ウジヨウジヨしていた男の子は軽^{けい}蔑^{べつ}したからよく覚えていない。校長秋山先生は、台所口の一枚の障子のきわに納まつて、屏^{びよう}風^{ふう}をたて、机をおき——机の上に孔^く雀^{じやく}の羽根が一本突立つていた。火鉢の罐^{かん}子^すの湯をたぎらせお茶盆をひきよせて、出来上つた人の格好を示してた。山茶花^{さざんか}の咲く冬のはじめごろなど、その室の炭^おの匂^{にお}いが漂つて、淡い日が蘭^{らん}の鉢植にさして、白い障子に翼^{はね}の弱い蚊^{あぶ}がブンブンいつているのを聞きながら、お清書の直しに朱^{しゆ}墨^{すみ}の赤丸が先生の手でつけられてゆくを見ていると、屏

風の絵の寒山拾得とおんなじような息吹いぶきをしているように、

子供心にも老人の無為の楽境を意識せずに感じていた。

さて教場の方は？ これは区役所の控所とも、授産場とも、葬

儀場ともいえる。後には六人一並びぐらいの板張り机になったが、

各自めいめい寺小屋式の机を持っていたころ、あたしが一年生時分は放

り出しておく幼稚園といつてよかった。しかし別段庭も空地あきちもな

いので机場おぎにおさまって遊んでいるのだが――まず硯箱すずりばこから

しておもちや箱に転化させて、水入器みずいれにお花をさす。硯箱一ぱい

に千代紙をしいて、硝子ガラスを――ガラス屋がそうはなかったから、

機械からくりの亀かめの子やその他の玩具おもちゃの箱の蓋ふたを集めて具合よく敷き

こんで、金、銀の丈長たけながや、金銀をあしらった赤や緑の巾はばひろ広の

丈長を、種々の透しを切り込んで屏風をこしらえて、姐さま^{あね}を飾りはじめる。姐様は、半紙で小さな坊主づくりを作つて、千代紙の着物をきせることもあるが、多くは、絵双紙店^{えぞうしや}で売っているのを切りぬく。自分ひとりではつまらないが、向側も隣席^{となり}もみんなしてするのだから面白い。さて、このアンポンタンがどんななりをしていたかというと、黒毛繻子^{じゆす}がやりだした時分なので、加賀紋^{もん}（赤や、青や、金の色系で縫った紋）をつけた赤い裏の羽織^{ラシヤ}、黒羅紗^{ラシヤ}のマントル（赤裏）を着て下駄は鈴のはいったポツクリだ。学校と露路^{あい}を間に^{かみや}して、これも元禄^{げんろく}年間に建った表町通りの紙店の荷蔵がある。その裏の何かを取りはらつて空地が出来た時、どんなに児童たちはよろこんだかしれない。向うの方に青い樹^きが

五、六本、教室の窓の竹格子にむかつて柘榴ざくろの花がまつかだつた。両側が土蔵と土蔵で、突当りが塀で他家よその庭木がこんもりしていた。

子供たちは鬼ごっこで無中になったが、なかで一番大おお童わらわなのが校長秋山先生だった。先生は運動場をもつたことと、子供たちが悦よろこぶのとで欣よろこびが二倍であつたと見える。お附つき合あいで困つたのが通いの先生だった。この通いの先生は——初め来たのは若い人で、この商業町に、というよりその頃はまだ法律家などは珍らしかつたものと見えて、私がそういう家の子だと知ると、特別にあつかいはしなかったが、少し待ってお出いでといつて、家の角まで送つて来てくれた。何か家のことでも聞いたりしたのかも知れな

いが覚えていない。ある日秋山先生が訪ねてきて、父と長く咄はなしていたが、それは私を送ってくれる先生が書生にしてくれといったのだあとで聞いた。

その次に来た先生が、鬼ごっこで恐縮していた人で、このおとなしい先生を子供たちまでが、校長と一緒に気持ちでさいなんだ。士族上りの先生は弱げで、細い鼻のさきが、いつも冷たそうに赤ばんで、水鼻がうるんでいた。色白の女のように色の白い人で、お能役者のような摺すり足あしで歩いて、小倉こくらの袴はかまを引きずり、さほど年もとっていないのに背中を丸くしていた。よほど困窮こんきゆうしていたと見えて、初めての日の中ちゆう食じきに、竹の皮へ包んできた握飯おにぎりと梅干をつまんで食べたので悔くってしまったのだった。千せ

住^んから歩いて来るので、朝早くから出るのに、雨が降ると草鞋^{わらじ}を穿^はいていた。秋山先生の弟子煩惱は大変なもので、ある折、市の聯合の大運動会が、桜の盛りの上野公園で催された。小さいながら代用学校と認められて参加を許されたのだから、先生は宇^{うちよ}頂天^{うてん}なほど悦んで、一層空地の鬼ごっこや旗とりが奨^{しょう}励^{れい}された。その日は区内の細かい学校が一かたまりになって、大きな公立小学校に対抗するので、源泉学校と染めた旗も出来上った。女の子は赤い緒^おの草履^{ぞうり}、男の子は白い緒の草履、お弁当はみんな揃えてお寿司^{すし}の折詰を学校からあつらえ、お菓子や飲料^{の飲みもの}のことまで世話人を定め^きたところが、あいにくその日は朝から曇って、八時ごろには地雨^{じあめ}になってしまった。無論子供たちも落胆して泣

いたが、附添いや何かに慰められて帰ろうとした。すると先生は帰つてはいけないと叫び出した。といって雨が降りやんだからとて、その日運動会が催うされるはずはないし、もう何処どこの学校でも子供は帰したからと、誰がいつても先生はきかなかつた。それでも、一人二人と帰つてしまつて、教場はガランとなる、其処そこ此処に赤や白の鼻緒の草履の山があつて、おすしをもつていったものも、食べたものもあるので残りすくなになつて、残つた手伝いが跡片附けをはじめても、先生は竹格子の窓に両手で顔をはさんだまま空を見詰めていた。さようならをしにゆくと、急に先生はたまらなくなつたように涙をこぼしだして激しいすすりなきになつた。

また、こんな事もあつた。

丁字髻 ちよんまげ

結いつたお侍とさむらい

お侍と男の子のむ

きあっている絵の読本の時間だった。

なんでも大変 吝 嗇 りんしよく

よく
な武

士で金銭ばかり数えている者で人に嘲あざけり起つて、人を助けなければならない時、

あざけ

吝りん 吝しよく

よく
な武

しもかえりみなかつたので、前に罵ののつ

の
の
し

齊ほ

齊ほ

ところで質問した。割合金銭のことに興味を持つ

—店の買物の代

価を、客から受取つて錢箱へ入れることや、売上げの勘定に

な

ている子たちも多かったので、話はよくきいていたが、なぜ

ほ

たかという質問には答えが満足でなかった。先生はジリジリして

褒めたくつてたまらないのが褒められないので機嫌がわるくなり

かかっていた。先生の底の方に光る眼が私の上にギョロリときた

が、暫くたゆたってから、

「ヤツちゃん。」

と指さした。子供は率直だ、あたしの家ではあまり金銭おかねの顔を見せない、あたしに金銭の貴さを知らせるには無理だった。だからこの場合、あたしはその武士がお金をならべて楽しむのは、あたしが姐あねさま様を飾るのとおなじ位にしか見えなかった。だから皆が考えかねているのが不思議でかえって自分の考えが間違ってるのかも知れないとさえおそれた。それでも言った、

「ふだんはお金が好きだが、人を助けるためには……」

そこだ！ と先生は飛上つて卓つくえを打った。堪えかねるほど待兼まちかねた答を、予期しないアンポンタンから得たので、先生の褒めか

たは氣狂いじみてたほどだった。

「傑えんらい、傑えんらい。その武士も傑えんらいが、ヤツちゃんも負まけずに傑えんらいぞ。

小錦こにしき関ぜきだ、やがて日ひの下開したかい山さんの小錦関こにしきだ。」

小錦という力士は後に横綱になったが、まだそうならないうち、新進氣鋭で売出しかけてでもいたのであろう。そういつて褒ほめあげた末に、人間は大將を望んでやつと兵卒位にしか出世をしないものだという事や、恐らく〇〇先生も世が世であれば大名を志こころ望ざしてお出いでだったであらうがなぞと、呆あきれ顔かたずに佇たたずんでいた、例の助教師の方へ嫌味をふりかけて、そのくせ人の好い笑顔をむけたりするのだった。

この教室の窓の格子のところへ、夏になるとお弁当をみんなが並べておいた。運動場へは台所口から出るのだった。台所には、みんなが持つてきてある小さい土瓶どびんが、せとものやのように幾段にも釘くぎにかけてずらりと並んでいた。お午ひるになると御新造さんが、番茶を酌くみ入れてくれるのをみんながとりにつくのだった。

ところがこの二、三日、午飯時おひるときになると、きつと誰かしらのお弁当が紛失なくなっている。今日も眼玉の廂ひさしとあだなされている、あたしの妹の分がなくなった。

年子としごのようなあたしの妹は、一年ばかり間を置いて学校へ上った。色の白い涼しい眼の子だが出額おでこなので前髪を深くきつてさげているので、眼玉の廂といわれていた。男の子なんぞに負けない

ので憎まれっ子でもあつた。

お附きの女中のついてくる、八畳の間の方のお嬢さんは、下駄箱も特別なら、課業もおひるまえ午前おひるまえ前おひるまえ前おひるまえぎりでお迎えがくるので、お前もまだ年がゆかないから午前おひるまえ前おひるまえだけにしろと祖母にいわれたのにきかないで、お弁当にしてもらつたばかりの、初との日に奪とられたのだつた。

おまつちゃんもは糸で編んだ網に入れてある、薄い硝子ガラスの金魚入れから水が洩もつて廻るように、丸い大きな眼に涙を一ぱい溜ためて堪こらえていた。奪もられたお弁当箱は、祖母が根負けして買つてくれた朱塗しゅぬりの三ツ重ちねの、小さい丸いので、女中が持つてきて置いていったばかりのいりたまごだつた。中身には御飯の上に煎いり鶏卵たまごと海苔のりを

かけて、いんげんまめ隠元豆のおかずに、味噌漬がはいっている約束になつ

ていたのだ。お弁当の袋をとるのが待遠しくつてならなかったのだ。となりにならんでいる女の子と、おかず副食物の分配わけつこの相談までしてあったのに――机の上には、新らしい小さな箸箱はしばこと茶ちやのみ呑茶碗が出ている――

おまつちゃんは露路の方を睨ねめて泣きたいのを堪えていた。大紙屋の白壁蔵の壁には大きな亀裂ひびあがあつて、反対の算盤屋そろばんやの奥蔵は黒壁で、隅の方のこんもりした竹が冷すずしく吹いている。石榴くろの花は赤く散りこぼれている。

女中がお弁当を持ってきた時に、

「御飯たが炊きたてですから、悪くならないように、風通しのよい

場処へお置きなさいまし。」

と念をおしていった。それでおまっちゃんは竹の風の吹く、窓の敷居の上へのせておいたのだった。昨日奪とられた子も、一昨日奪おとといられた子も、窓に近いお座ざだった。

あたしは自分のお弁当をおまっちゃんに持つていつてやつたが、おまっちゃんは見向きもしないで、窓に石盤せきばんをのせて、色石いろせき筆ひつであねさまを絵かいていた。あたしも仕方なしに佇たたずんでいた。すると、窓に並んだ勝手口の方で、カタンと金属かなものの音がした。あたしも見た。おまっちゃんも見た。

露地の出口を乞食こじきのような老人としよりが出てゆく後姿が見える。そ

の老人のさげてゆくものがカタンカタンと鳴る。

「鍋が——鍋が、鍋が。」

おまつちゃんは出来るだけの声をだした。

秋山先生は御飯後の苦いお茶を喫んで、蘭の葉色を眺め入っていた。

老人は溝板をドタドタと駈出した。鍋がガチャンとぶつかった音がした。台所からも御新造さんが怒鳴りだした。生徒たちもワーツと声をあげた。

秋山先生は袴の股立ちをとって飛出した。生徒もみんな加勢に飛出した。表通りからも、裏通りからも、番頭さんや小僧や、権助さんまでが火事と間違えて駈けつけてきた。

泥棒はあわてて、向う裏へ逃げこんだが、それでも鍋はさげているので、逃げだした道筋には味噌汁がこぼれていた。老人の泥棒はまごついて外後架へ逃込んで、中から戸を押えていた。先生は持つている鞭で、戸をはたいて、

「出ぬか、出ぬか。」

と怒鳴った。見物の弥次馬は笑ったが、生徒たちは真面目で先生という通りに怒鳴った。そうすると泥棒は体をかくしたまま、戸の上から鍋だけさしだした。先生はその手首をグイとひいたので、味噌汁を肩から浴びてしまったが、カツとした勢いで引出したので、汚い老人はブルブル顫えながら出てきた。

先生は勝誇って揚々と、片っぱの手に鍋をさげ、片っぱの手

で老人の肩をひつつかんで引摺ひきずった。大得意で先生は大通りを人形町の交番へと、老人を引渡しにいった。生徒も弥次馬も後からぞろぞろとつづいた。

おまつちゃんもあたしもその時だけは先生を憎んだ。なにをきかれても答えなかった。

祖母は秋山先生一家を信頼しきっていた。時折訪問したが、孫たちの方へは目もかけずに帰った。台所口から家の使つかいが、お盆へ乗せてふくさをかけたものを持って来ていたが、厳きびしくしてくれと頼んでいる様子だった。

おまつちゃんは強情だった。二人がお灸きゆうを据えられるとき――

私の家では、一日に二度も三度もお灸の出る時があつた。はなはだ 甚しい
 時は、お灸を据えられて後泣きあとなをいつまでもしているからといつ
 てはまた据えられた。灸は薬だからと、灸好きの祖母が許すので、
かんしやく 疔癰 もちの母は、祖母へ対して不服な時も、父へ対して不満
 なときも、子供の皮膚を焼いた。痩やせた女ひとの股ももほどもある腕をも
 つている体格の、腕力の強い母親だつた。ドサリと背中へ乗りか
 けられてしまうと、跳はねかえ返すことなどは出来なかつた。妹は秘蔵
 つ子だつたが、それでも仕置の時だけは別で、強情な彼女は腕を
 脱ぬいたりして、小伝馬町の骨接ほねつぎの百々瀬ももせへ連れてゆかれた。あ
 る夏の夕方、彼女が麦藁帽むぎわらぼうをかぶつて、黄麻こうまの太がすりの維かたび
 子らを着て、浅黄ちりめんの兵児帯へこおびをしめて、片腕ブラリとさせ

て俤夫しやふの松さんに連れられて百々瀬へ行く姿を、あたしは町の角で、夕霧ゆうもやにうすれてゆくのを見送りながら大声で泣出したくなつたのを覚えている。そんな風なので、お灸の時、あたしは滝にうたれたように、全身の膏汗あぶらあせにへトへトになつてしまつてゐるが、おまつちゃんは何処どこまでも反撥はんぱつした。お小用だというのが癖で、それで手をゆるめると逃るので、出たけれどもよいという、小さな彼女はもうお灸の熱さも、乗つていられる苦しさも忘れて、出もしないお小用を絞りだそうと一生懸命になり、目的通りにやると、も一層激しい憤りいきどおを母から受けるのであつた。だから学校でもよく残された。あたしもお相しやうばん伴ばんをさせられる。課業のあるうちは、黒板の下へお線香と茶碗おみずの水をもつてた

たされるのだが、彼女は笑いながら水の中へ線香を突込んで火を消した。お残りは、広い教場へ二人だけ残されるのだ。机を積み重ねた上を渡ったりして二人は仲よく遊んだが、臆おくびよう病だったあたしは、夕暮ちかくなると悲しくなりだした。あたしは別に残っていなくてもよいのだが、どうしても妹を残して帰れないので——そんな時、意地悪く家からはお礼を言いに使いが来たりした。もうよい頃と見ると、秋山先生が、まずあたしだけを部屋へよんで、お茶をくんでくれて、ぼた餅もちをとってくれたりする。すると、きつとあたしが泣き出すので、それからおまっちゃんを連れにゆく。おまっちゃんにもおなじようにぼた餅をとってやる。

暮れかかった町を、二人の幼い姉妹が連れだって帰ると、後の

方から離れて、秋山先生がそつと送つてついてきてくださる――

秋山先生は女の子の仲間にいると女親のようにものをいった。

ある春の日、山吹きの新をぬいて、紅べにで染めて根がけにかけて

きた小娘こむすめが交つて、あたしのお座をとりまいていた。あたしは

いつもの通り石盤へ人間を2の下へりの字をつけたような形に描いて、昨日の続きの出たらめ話をしているときだった。

「金坊きんぼう、沈丁花ちようじの油をつけてきたね。」

と通りがけに先生が言った。金坊とよばれたのは古帳面屋の娘で、清元きよもとをならっている子だった。ニコリと笑った、前髪から沈丁花の花をだして見せた。

この学校の向うに、後日ごにちあたしが生花いけばなを習いにいった娘の家

で、針医さんがあつた。もすこしさきへゆくと、堀ぎわに堀井戸があつて、門内に渡り廊下の長い橋のある馬込まごめさんという家があつたが、その女中がお竹大日如来だつたのだといつて、大伝馬町の神輿おみこしの祭礼おまつりの時、この井戸がよく飾りものに用いられたが、ある時は団七九郎兵衛の人形を飾り、ある時はその家にちなんだお竹大日如来がお米を磨といでいて、乞食こじきに自分の食をほどこしをしているのだつた。

その隣家となりに清元たゆうの太夫とかいう瓢箪ひょうたんの紋の提灯ちようちんをさげた駄菓子屋があつた。石筆や紙や学校用品を売っていたが、売手のおかみさんが上手なので、近いところよりも、生徒はそこに集まつた。おかみさんは学校用品よりも、青竹の筒にはいった砂糖

蜜入りのカンテンや、暑くなるとトロテンの突いたのをお皿に盛って買わせた。おかみさんはよく話した。清元のお師匠さんをして自分の旦那が、非常に声がよかつたので仲間にねたまれて、水銀をのまされたので、唄う方が出来なくなつたので、仕方なしに三味線の稽古けいこをしているのだと、芸人のかなしみを、子供が感じるようにしみじみというのだつた。だから、品物を買つておくれといった。

そのすこしさきの町角に杯口屋ちよこやのおくんちゃんの家がある。お国ちゃんくんはあたしとおみき徳久利どつくりのように、長唄のおつきあいやちいにお師匠さんに連れてかれた少女ひとだから、そのうちに書かなければならない。

学校の一軒さきに大きな人力車宿くるまやどがあつて、お勘かんちゃんという、
 色は黒いが瘦やせがたなキリリとした、きかない氣の、少女こむすめでも大人
 のように氣のきいた、あたしのために、あたしの家へよく忘れも
 のや、言ことづ伝けを言いにいつてくれた娘があつたが、後に吉原で奴や
 太夫つこたゆうという名でつとめに出ているときかされたことがある。そ
 の手前に表通りの砂糖問屋の磨きあげた、黒塗りの窓のある住居
 蔵があつて、お糸さんという豊かに丸っこい娘さんの琴の音がよ
 く聞えていたが、隣りに、とてもみじめなまず乏しい母子二人おやこの荒物
 屋があつて、小娘のおとめさんもお婆さん見たいにうつむいて、
 始終ふるえているように見えた人だつた。

その斜すじむこ向むこうに花屋があつた。剥身むきみのように幅の広がった顔と

体の妹と姉とがいた。二人がいるうちは花屋の店もよけい賑かに
見えたが、馬喰町ばくろちようの郡代ぐんだいの矢場女やばおんなになつてしまった。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2003年4月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源泉小学校

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>